

ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討
——放課後子ども教室地域サポーターの語り事例から——

北原靖子*・佐藤哲康**・蓮見元子***
生駒 忍****・川嶋健太郎*****

Examination of the Factors Which Help One Continue
a Volunteer Activity
From the Narration Example of an After-School Classroom Supporter

Yasuko KITAHARA, Tetsuyasu SATO, Motoko HASUMI,
Shinobu IKOMA, Kentaro KAWASHIMA

要 旨

今日わが国でも、さまざまなボランティア活動が展開されている。たとえば千葉県我孫子市の放課後子ども教室には、地域市民サポーターが、児童の放課後活動を支援する有償ボランティアとして参加している。地域で子どもを育むことは有意義だが、規律がゆるく出入りも激しい現場の中では、子どもたちに関わる上での困難も多い。いかに子育てに参加する人材を増やすかと共に、参加後の活動継続をいかに支援できるかも課題である。そこで本調査では、放課後子ども教室に開設初期から関わるAさん(60代女性)の協力を得て、五年にわたる読書普及活動経緯について語っていただき、その逐語記録を基に活動継続に関わる要因について検討した。

Aさんは、その時その場での達成は多く得られなくても、ストレス・コーピング研究で指摘されてきた複数の対処法を柔軟に用いて乗り切っていた。読書普及活動や子ども対応へのキャリアがあること、仲間や理解者のサポートや時間空間のゆとりがあることは有益であった。また、必要活動を絞り分業を工夫する様子は、サクセスフル・エイジング研究で指摘される選択的最適化に通じていた。今回は読書という「特定の切り口」を持ったボランティアの事例であったが、見守りサポーターのように特定活動をもたずに関わる場合ではどうかについても、今後検討が必要である。

キーワード：ボランティア活動，継続要因，コーピング，地域住民，事例検討

*教授 発達心理学

****非常勤講師 認知心理学

**助教 臨床心理学

*****東海学院大学 准教授

***教授 発達臨床心理学

問題と目的

平成 19 (2007) 年に文部科学省厚生労働省共同で策定された放課後子どもプランを受け、これまで各市町村は、児童が放課後安全で健やかに過ごすための放課後子ども教室事業を展開してきた。子育て環境整備に積極的な千葉県我孫子市では、プラン開始段階ですでに公立学童保育室全校配置が完了していたが、この放課後子ども教室設置にも当初から前向きに取り組んできた。二年間モデル事業を展開したのち放課後子ども教室は学童保育との一体化運営に変換され、学童保育室の混雑状況などの地域性を踏まえつつ市内公立 13 の中 5 まで教室数を増やし、「あびっ子クラブ (以下あびっ子)」の名で親しまれている。平日及び長期休暇など普段から使えること、校庭体育館や図書館など学校施設が使えること、チャレンジタイムと呼ばれるさまざまな体験活動が提供されていること、年間わずかな登録料で利用できることなどを受けて、あびっ子には学童保育を利用する児童が重複登録するのはもちろん、多くの保護者在宅児童が登録し、放課後の居場所の一つとして活用している。放課後にランドセルを置き、宿題をしたり、ゲームをしたり、球技をしに行ったり、本を探しに行ったりなど、さまざま思い思いの活動をする児童の姿は、ネット上でも紹介されている (文部科学省・厚生労働省放課後子供プラン連携推進室, [online](#))。我孫子市内には児童館がないのだが、専門施設がなくても学校敷地内で子どもの居場所づくりを進めることができているといえよう。

こうした子どもの放課後居場所づくりは、平成 26 年 (2014) 度からは放課後子ども総合プランとして展開されることとなった。新プランでは「いわゆる『小 1 の壁』を打破する」として育児支援の観点が増味されているが、「次代を担う人材の育成の観点からは、共働き家庭等の児童に限らず、全ての児童が放課後等における多様な体験・活動を行うことができるようにすることが重要」として、子育て支援の従来目標も継承されている。その結果として、「放課後児童クラブの受皿を拡大するとともに、一体型を中心とした放課後児童クラブ及び放課後子供教室の計画的な整備を目指す」とされ、我孫子市のような一体型運営はこれまで以上に広がると予想される。西村 (2013) は、一体型では共同体や関係性が希薄になりがちで所属感が低くなる懸念があると指摘しているが、逆にいえば一体型は、決まった年齢や仲間としか付き合わない今日の子どもたちに「開かれた出会いと交流の場」を提供する可能性を秘めているはずである。その可能性をつぶさず、出会いと育ちの場として機能させる検討が求められるのである。

そのような中、地域の人材がボランティアとして参加することは、子どもたちに多様な体験交流の機会を提供するだけでなく、「開かれた場」の特性を活かして地域の子育ち意識や関係

性の形成にも寄与すると期待できよう。我孫子市では随時関係者や広報やあびっ子便りなどを通して、往復交通費程度の実費で子どもの放課後見守り手となる有償ボランティア（あびっ子地域サポーター）を募集している。サポーター活動としては、子どもたちに「チャレンジタイム」として囲碁、工作、けん玉、ショートテニスなど特定プログラムを提供する「チャレンジ」と、スタッフと協力しながら各場所で子どもの自主活動を見守る「見守り」がある。希望者は市担当やあびっ子コーディネータと話し合いながら、自分に合った場所やペースや内容で活動に参加する。またあびっ子ごとに、サポーター同士が集まって話し合うサポーター会議も行われている。活動の詳細は校区によってさまざまだが、いずれも現段階では人手十分とはいいがたく、見守り手の参加や定着を増やすことが求められる。

こうした一般地域住民のボランティア参加を広めるには、広報や情報提供の拡充と共に、どうすればより活動しやすい場となるかについての検討が不可欠である。北原・柴田・蓮見・川島・浅井（2009）は、設置初期のあびっ子でボランティア参加している地域住民に面接や質問紙調査を行い、サポーターたちは余暇活動に対する意識が高いだけでなく、子どもたちを巡る今日の社会情勢に危機を感じ、地域づくりに貢献したい思いがあることを示した。その一方、柴田・北原・蓮見・川島・浅井（2010）は、サポーターが放課後子ども教室での活動において「介入のむずかしさ」「成果の見えにくさ」「専門性の不足」「気がかりな子」などの難しさを抱えていることを示した。放課後は授業から解放され大いに発散したい気持ちが高まるときであり、あびっ子は出入り自由で縛りもゆるい場である。低学年が多く上手に仲間と遊べないときもあり、大人は優しいだけではなく、助言したり手本を示したりしつけしたりなど、状況に応じた柔軟な対応が求められる（蓮見ら、2011）。以上を踏まえるなら、ボランティアが子どもたちとうまく関わって活動継続する上では、謝礼額を増やすといった経済的支援よりも、活動の中で出会う困難を受け止め軽減する支援の充実が求められよう。

しかしながら著者たちが当時行った聞き取りでは、あびっ子開設当初だったこともあって問題点の発見と提起が中心となっており、サポーターが活動の中でどのような糧を得ているか、また、活動を継続させるうえで何が役立っているかは明らかではなかった。サポーター活動の魅力（心理的利得）や、問題があっても工夫して乗り越える知恵を明らかにして共有化することも、問題点の指摘に勝るとも劣らずボランティア拡大に寄与するであろう。ポジティブな観点からの心理要素については、近年では、逆境に耐える力であるレジリエンス研究や、各種喪失に遭遇しても主観的幸福感を維持するサクセスフル・エイジング研究の中で注目されているが、ボランティア活動の中で熟年のストレングスがどのように発揮されてゆくかについての具体的検討は多くない。また活動継続に伴い、個人の中でどのように認識が変容成熟してゆくか

については、集団次元では検討されている（高橋，2014）が、個人次元での語り資料は少ない。

そこで本研究では、あびっ子開設当初から今日までサポーター活動を継続しており、初期の時点でも放課後調査面接にご協力いただいたAさんから、改めて自分が関わっているあびっ子での活動経緯についてお話しいただいた。また、活動を継続する上で役立ってきたと感じる事柄について、仲間のDさんと共に思いつくことを挙げていただいた。本研究では初年度のAさん面接記録（川村学園女子大学放課後子ども研究会，2010）も参考にしながら、どのように活動継続を工夫していったかの具体的な語り資料を得ること、また、こうした地道なボランティア活動継続に寄与する諸要因について検討することを目的とした。

方 法

対象

開設当初からあびっ子サポーターとして5年にわたり読書関連のチャレンジタイムを行っているAさん（60代女性）。都心で長年小学校教員を務めたのち、我孫子地域内複数の場で読書普及のボランティア活動を行っている。児童と関わる経験が豊かで、参加当初から地域貢献への意欲も高く、ボランティア活動上の目的意識も明確であった。あびっ子サポーターとしては理想的な人材であり、今回調査が目的とする継続要因抽出において最小限不可欠な要因を押さえるのに、まさに適切だと考えて依頼した。また第二回面接では、近年3年にわたりチャレンジタイムを一緒に行っている活動仲間Dさんにも同席いただき、情報提供を得た。AさんとDさんが実施しているのは「おはなしのへや」と呼ばれるチャレンジタイムで、暗唱・本の読み聞かせ・素語り・ペープサートなどを二人が交互に担当しながら進める30分ほどのプログラムである。子どもの参加に苦勞しながら工夫を重ねて、ほぼ現在のかたちに定まって安定した状況にあった。

材料

面接に際し、以下の用紙と筆記用具を用いた。

ライフライン記入用紙（第一回面接）

A4白紙1枚。中央に短い縦線と長い横線を左横倒し十字架状に引き、あびっ子参加初年度を縦横の交差点0として、一年ごと右端の現在まで目盛を打った。ライフラインは過去から現在までの状況を一貫性を保って客観視する上で役立ち、また他者と感情や体験を安全に共有する道具としても有益であり、エンカウンターグループでも活用されている（川村，2000）。

カード（第二回面接）

名刺版白紙 10 枚程度。活動継続に関係する事柄について、思いついたことを記入してもらうためのもの。

手続き

全ての面接は、第一執筆者が担当した。また面接に先立ち調査の趣旨を説明し、情報提供と IC レコーダの使用許可を得た。

第一回面接

ライフライン記入用紙を渡し、あびっ子への参加当初から5年経た今日までを思い起こして、各年度の活動上で感じていたところの浮き沈みを縦軸上に、よいときを上、わるいときを下として、開始から現在に至るまでの経緯を線で結んでゆくよう求めた。

およそ10分ほどでライフライン記入が終わったのち、それを一緒にながめながら、時系列に沿って順次節目の説明を伺いながら、活動継続に関わる事柄について尋ねていった。また話が進むにしたがって、必要に応じてライフラインを延長して確認した。面接時間は約1時間であった。

第二回面接

カードを配布して、自分の活動が続いている上で役立っていることについて思いついた事柄を1項目1枚ずつ、カードに記入してもらった。一通り出尽くしたのち、似ている項目があればまとめるなど分類整理し、まとまったものには名づけしてもらった。これらの作業が終わったなら、カード内容を説明頂き、その後不明な部分は質問して確認した。活動仲間で同席して頂いたDさんにも、面接前半は分類作業を行ってもらい、後半は一緒に質疑応答に参加してもらった。面接時間は約40分であった。

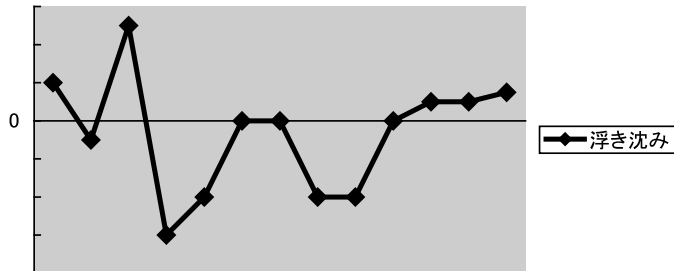
面接経過

ライフラインに即した心境推移（第一回面接）

第一回面接でAさん自身が描いたライフラインと語りをもとに、ライフライン上の節目に番号を打って見出しをつけ、図1に整理した。客観的事実関係については、初年度の面接記録も参考にして確認した。

①②仕事への疑問がつのる

長年小学校教員として充実した日々を送ってきた。しかし時代の流れの中、保護者対応など



- ①② 仕事への疑問がつのる
- ③④ 退職に伴う浮き沈み
- ⑤ 市民講座に参加する
- ⑥⑦ 目標活動（読書普及）に関わり仲間を得る
- ⑧ 目標活動を地域で始める（あびっ子も活動開始）
- ⑨ あびっ子で当初仲間が離脱し、試行錯誤する
- ⑩ あびっ子で価値観が同じ仲間 D さんと出会う、地域の縁がつながってくる
- ⑪⑫ あびっ子のブラッシュアップしながら、地域で目標活動展開
- ⑬ 活動の流れや体制が一通り整ってきた

図1 Aさんにおけるあびっ子活動のライフライン

授業外の面倒事も増え、指導的役職がついて若手に負担を強いる立場になったことも辛く、次第に身体的・精神的に不安が募り、報酬的にも疑問を感じるようになった。

③④退職に伴う浮き沈み

朝の読書を通して荒れた学校を立て直した尊敬する女性校長が定年を迎えるのを機に、自分も体力があるうちに地域に入って第二の人生にチャレンジしようと考えた。定年まで二年残しており、学校からも惜しまれたが、迷いはなかった。退職直後は仕事の荷物をすっかり処分し、意気軒昂だった。しかし何をすればよいかわからず、半年後には食べ物の味がわからなくなるくらい落ち込んだ。心療内科に行ったら頓服と胃薬を処方され、逆に医者任せにできないと発奮した。

⑤市民講座に参加する

自分が以前やっていた習字をまたやってみようと市民講座を受講し、知己を得て、食事などしながらいろいろ情報を吸収していった。広報を読むことも学び、地域に入る第一歩を踏み出した。

⑥⑦目標活動（読書普及）に関わり仲間を得る

もともとやりたかったこととして、図書館の読書普及スタッフ（5年任期）に応募した。絵本の絵の重要性をはじめ、本の選び方など鍛えられた。また志を同じくする仲間たちとも出

会った。

⑧目標活動を地域で始める（あびっ子も活動開始）

任期完了を翌年に控え読書普及活動の場は自分で開拓しなければならず、仲間で読み聞かせグループを結成し代表になったが、すぐには活動の場がなく、メンバーそれぞれ試行錯誤した。メンバー B さんの誘いを受けて、あびっ子での読み聞かせ活動を始めた。

⑨あびっ子で当初の仲間が離脱し、試行錯誤する

誘ってくれた B さんは、子どもが聞いてくれないので耐えられないと止めてしまった。プログラムを変えたり新たにサポーターをしていた C さんと組んでみたりと、試行錯誤したが、なかなか満足のいくようにならなかった。

⑩あびっ子で新しい仲間と出会う、地域の縁が繋がってくる

あびっ子コーディネーターから紹介があり、あびっ子で素語りをする D さんの活動を見に行き、組むことになった。また赤ちゃんの読み聞かせ活動をする中で、「活動したいなら“まちづくり協議会”に入らないと」と助言され、読み聞かせグループ代表として参加した。

⑪⑫あびっ子のブラッシュアップをしながら、地域で目標活動展開

D さんとのプログラム進行は当初からうまくいっていたが、子どもに来てもらうためにどうしたらよいかについては、試行錯誤した。一方、街づくり協議会に入ったことを通して、読み聞かせグループの方では読書感想文支援活動も始まった。

⑬活動の流れや体制が一通り整ってきた

あびっ子での活動も、読み聞かせグループとしての活動も、ほぼ形が定まった。もっとよいやり方もあるかと思ったりもするが、コーディネーターによれば他小学校あびっ子での読み聞かせも大変とのこと、迷いが無いわけではないが、当面これでよいかと思っている。

カード分類作業に基づく本人分析（第二回面接）

あびっ子でのボランティア活動継続に役立つこととして、A さんは9項目を出し3つに分類したうえ、重要度順に並べて各々分類名をつけた。重要な要因としてまず A さんが名づけたのは「活動場所と時間」（3項目）であり、自分に無理がないことが一番大切とされた。また次に子どもたちと関わりを通して自分が得たもの貢献できたことなど3項目を、名づけに迷いつつ、「自己満足？」と疑問符をつけてまとめた。最後に挙げたのは「活動内容（3項目）」であり、自分が意義を感じる読書普及をしていることであった。これらは第一回面接で語られていたこととも概ね一致していた（表1）。

表1 活動継続に関わる要因についての協力者本人分析 (Aさん)

協力者	項目	分類名
Aさん	・自分の行ける場所（近いところ） ・あびっ子の中のメンバーの雰囲気がよい ・活動時間が自分の都合に合わせられたこと	活動場所と時間
	・子どもたちと接していることが楽しい ・子どもたちの参加が増えてきつつあること。子どもたちに認めてもらえたこと（工夫・試行錯誤あり） ・何か、人のためになっているかな、と、自己満足が得られている	自己満足？
	・自分がやりたかった活動（読み聞かせ）ができたこと ・一緒に活動してくれる人との価値観が同じ ・活動内容にあまり干渉されずにアバウトな打ち合わせができたこと	活動内容

(注) 協力者自身の分析通り、項目は記入順、ラベルは重要度順

語りの分析結果と考察

コーピングとサポートの抽出と分類

面接中、あびっ子でのボランティア活動継続に関わる出来事や思いについての語りが出たときは、+（続ける気持ちが高まったこと）・-（実際に意欲が下がった、あるいは、そうであればきっと意欲が下がること）両面とも詳しく伺った。分析にあたっては、まず面接2回分の逐語録を作成し、子どもが来なかったりうまく活動に参加しなかったりしたストレス状況への対処にあたる語りを抽出し、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・板野（1995）が三次元対処方略モデルをベースに二次因子として提示した『問題型（《情報収集》《計画立案》《カタルシス》など問題解決に向かい他者サポートを利用する）』・『回避型（《放棄・あきらめ》《責任転嫁》など問題解決から回避する）』・『気そらし型（《肯定的解釈》《回避的思考》《気晴らし》など情緒調整に向かう）』の3コーピングに則して位置づけた。また、「これでない（と）続かなかった（-）」といった語り部分から、具体的なコーピングに先立ってAさんを支えたと思われる基本的な『環境資源《人的》《物的》』も抽出した。これらをまとめた結果は、表2として挙げた。

Aさんの対応では直接的な『問題型』だけでなく、曲線的な対応である『気そらし型』も一部用いられていた。また、《計画立案》して工夫を凝らしたが子どもの数がそれほど増えなかったときは、「（工夫しないのと）やっぱり違う」と《肯定的解釈》に変更して、自分に達成感が得られるようコーピングを調整していた。Aさんの場合、このように対処法が多面的で柔軟であると共に、気の合う仲間や場所の近さなど環境サポートにも恵まれていることが支えになっていると思われる。

表2 Aさんの語りと抽出したコーピング・環境資源

『問題型コーピング』	
面接	『情報収集』《計画立案》→【参加システムやプログラムを工夫した】
I-⑪	<p>「2人が悩んで。あの、来ないんですよ、子どもたちが。あら今日も来なかったわっていう。(略)それで、音読をやって暗記できた人には合格証渡そうかって。やっぱりね、来るだけでは達成感も何もないから、達成感があるようにしてあげなくちゃって言うので、それで参加カードを作ったんですよ。</p> <p>(他のところでもやられているのがありましたよね)</p> <p>「そうそう。そういうのもあって、やっぱり何かやらないとだめかしらというのはあったのです。それで暗記できた子に合格証と、それから10回以上参加したら何かあげようかっていうので、クリアケース100均で今いろいろあるじゃないですか、かわいいのあげればよかった。その前は折り紙で箱作って、そこの中にかわいい消しゴムを入れようかとか。でもあれはねえ大変だからねっていうことで、クリアケースだったら使えるから、A4だったらお手紙入れるのに使うから、100均で買おうかって」(略)</p> <p>(どうですか。それをやってみたら?)</p> <p>「やっぱりね。違うんです,.. やっぱりもらえると違うんです、普通のものなのに、人からいただくっていうのは。だから、その、でも、そんなに来てる子が沢山いるわけじゃない」(略)</p> <p>(この仕組みができたあたりから、また上がってますよね)</p> <p>「そうですね、そこいらへんから上がってきたというか。でもね、やはりふつうの時は、来ないときはやっぱり悩んで」</p>
I-⑬	<p>「あと音読をして、みんなの前で言えると、名前のシールを紙に貼ってもらえるので、これも嬉しいみたいで、一年生が多いので、名前がそこにあるというのが嬉しいみたい」</p> <p>(名前シールはどこに貼るんですか)</p> <p>「大きな紙、今もそこに貼ってあると思いますが、そこにかわいいシールで名前、音読で合格しましたみたいな。何月何日・何年何組・名前、ちょっとを覚えましてっていう合格証をもらえるっていうのがいいみたいなんです」</p> <p>(合格証をうちに持って帰ってお母さんにも見せられるという)</p> <p>「そうそうそう」</p> <p>(家庭用と教室用の両方用意したんですね、なるほどね)</p>
I-⑬	<p>「今のでねこう、子どもたちに定着しているから、ここに行けば音読をやってっていうパターンが決まっているので,.. プログラムを外に貼るようにしたので、子どもたちも今日は何をやるかがわかるんだろうと思うんですね。だから、なんだろう、そんなに上がり調子で行くとは思わないですけど、でも何となく子どもたちの中にも、●曜日はこれがあるんだろうなあっていう感じで。雨が降ってれば、行くところがなければそこに行けば何とかなるんだろうなって、そんなのあるかもしれないですよ」</p> <p>(わかってもらえて、馴染んできた感じがある)</p> <p>「そうそうそう。そうだと思いますよね」</p>
『情報収集』《カタルシス》→【現場のスタッフに相談した】	
I-⑧	<p>「(はじめDさんと組むとき) やっぱりちょっと考えたんですけど。ちょっとやってみてだめだったらって、あのコーディネータさんはあまり縛らない方だから、だめだったらやった後でも直せばいいんじゃないって言われたので、気軽にじゃあやってみましょうかみたいな感じでスタートしたのです」</p>
I-⑫	<p>「他のところのおはなしの部屋はどうかしら、見に行こうかしらって、コーディネーターさんをお願いしたことがあるんですよ。そしたら(見に行ってくれて)「向こうも全然来ないわよ」って。根戸小のところかしら。「向こうも来なくて大変みたいよ」っていうお話を伺って,..」</p>

《カタルシス》→【専門家の助言を得て救いを得た】

- I-⑨ 「どうしたらいいのかなあって。やめるのは簡単だし。というので、その時にやっぱり本を借りに行って図書館に行った時に、図書館の方に「難しいんですよ」って話していたら、図書館の方っていうのはそれなりのプライドというかそういうのがおありなんじゃないかな。「いいんですよ。本っていうのは、1人の子でもいいから聞いてくれる子がいたらいいじゃないですか」って、そんなふうに言われて、「そういうもんなのか」ってっていうのがあって（それは救いになりましたか？）
「なりましたね。1人でもいいから聞いてくれる子がいたら、その子のためにあるっていうのでいいんじゃないですかって言われると、へえそんなものかって」
-

『気そらし型コーピング』

《肯定的解釈》→【興味のある子、好きな子もいる】

- I-⑬ 「今度いつ来るのって、そういうことを言う子がいるんで、やっぱり悪くはないんだなって、こういう読書をするっていうのはって。結構好きな子は見てるんですよ、読んだ後も、手に取って。こういうので図書館に行って本を読むのかなって思ったりしますよね」
- I-⑬ 「結構ね、男の子って恥ずかしがり屋だから、.. 男の子4人とか5人とかで入ってきて、1人が帰ると自分も居心地が悪いなあっていうんで、何となく出て行っちゃう子がいるんですよ。それでも、「今度どの話があるの」とか聞いたりするので、本当は好きな子だけど、男の子っていうのは、お話の部屋に入るっていうのがちょっとカッコ悪いっていうふうに感じている子があるのかなあって思いますよね。女の子もね、本当に好きな子は私たちが帰る頃になると、あそこの部屋にいたりして、「ああ、今日行けなかったなあ」とかそんな事言う子がいるので、まんざらでもない、興味はあるんだなって思いますね。.. 今度いつ来るのよって話をすると、「じゃ今度行く」とか言ってくれると、ああ大丈夫だなあとか、ちょっと嬉しいですよ、そういうのは」
-

《肯定的解釈》→【こういう場所だからいいこともある】

- II-(2) (こういう場所だからこういういいところも子供の側にあったところがあるところがあるか) 「あの、ありますよね。教室で恵まれない子が、こういうところに来てうっふんばらししていくことってありますよね。今日は先生にすごくやられたとか。友達と何かあったんだろうなっていう。何か言いたいことしゃべっていきいきましたよね。だからここはお母さんにも言えない、先生にも言えないクラスにも言えない、言えないものをここで思いっきり鬱憤晴らして、好き放題やって、結構暴れる子もいましたよね」
(ガス抜きしていくっていう)
「そうそうそう。本読むよりも走り回ったりとか。それでもいいかみたいなの。.. ここは2人とね。あんまり「静かに」とかうるさく言う場所じゃないから、ここに行けば適当に話し相手になってくれる。Dさんもやさしいから、ちゃんと聞いてあげてるの」
-

《回避的思考》→【特殊な場だから仕方ない】

- I-⑬ (途中から入ってきたりすると大変ということはないですか?) 「気にしない」
(気にしない)
「だから、お話の途中でも出て行くんですよ。で、しょうがないから、「そこでちょっと聞いていたら」って言うのですけれど、そこを強制してしまうと入りづらいお部屋になってしまうので、そこはしょうがないかって。
(しょうがないかって思えるのは、「一人でも好きな子がいればいいじゃない」っていうのと) 「ありますよね。それと、やっぱり、特殊な場所ですよ、ここは。決められてこうやってあらねばならないというお部屋じゃないので」
(ああ、そもそもがそういう場じゃないという)
-

ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討

「そうそうそう。そんなにきつくは言いたくないし、言うとも、やっぱりお話の部屋っていうのは窮屈な部屋だなんて。思われたら来ないだろうし。(略)そこはあまり、強制はできないなあって」

【環境資源】

《人的資源》→【価値観が同じ仲間がいた】

I-⑩ 「(価値観が同じではない仲間と組むと)新聞で紹介されて面白い本とか新刊とかありますでしょ、ああいうのを,..「受けるからいいだろうな」みたいな、それだけじゃ読み聞かせに意味はないんじゃないかなって思ったりするんですよ。(略)たまにそういうのをフツと感ずると、せっかく選んだことに対して言えるものじゃないので,..」

I-⑨ 「そういう時にちょうどDさんとお会いしたんです、この方はずっと家庭文庫をやっていた。だから本当に、本の中身がよく分かっていらして。ですから,..私にとっては非常に価値観が同じみたいな、共有できる方だったので」
(それじゃ、見に行ってきたらちゃんとやってらっしゃる姿にも打たれたけれど、それもあるけど中身がいいなという)
「やっぱり、考えがすごい方だなあっていう。考えている中身の意識の高さですよ」

II-(1) 「やっぱり価値観が同じ人と一緒にやれたというのはすごく大きいと思います。そうじゃなかったら私、続いていないと思う。細かい打ち合わせをしてあだこうだって言われてしまうと、しんどいですけど」

《物理的資源》→【距離と時間のゆとりがある】

II-(1) 「わたしは本当に単純に、近いところに自力で行けるというのが、やはり一番大きかったんです、続けていられるというのは」

I-⑩ (ベースも、あまり根づめて週1回とかではきついなあっておっしゃってましたよね)
(-) 「そうです、月2回にしているのもいいと思います。ちょうどいい感じですね。あまり束縛されちゃうと、自分の時間もね、仕事やめて何だったのかなあって」

(注1) 面接とは、語りが得られた面接回 (I : 第一回, II : 第二回), と対応番号 (第一回は①~⑬, 第二回は個別 (1)~共同 (2)) を示す

(注2) 「」はAさん, () は面接者の語り, …は語り中の沈黙,.., は重複などの表現整理, (略) はやりとりを中途割愛をしたことを示す

(注3) 「」はコーピングと環境資源の大分類, 《》は小分類, 【】はAさんの語りの概要ラベルを示す

テーマの抽出と関連要素

「これがあるから続いた」という説明からは、本人の中に「これをしたい、これが大切」と思ってきたことがいろいろある様子が伺え、継続 (= ねばり) はその背景にあるテーマ (= 望み) の元で意味づけると了解しやすかった。そこで、本人の挙げた継続要素 (表2) の語りをライフライン (図1) の語りとも重ねながら、Aさんの『希求 (テーマ)』として概念化を試みた。

まずAさんには、仕事に追われてきたこれまでから『人生のシフトチェンジ』を果たして、地域で豊かに充実した人生を送りたいという思いがあった。また退職後も、何らか人の『お役に立つ』ことをしたいと考えていた。さらには、かねてから研鑽を積んできた読書普及活動という『目標の遂行』ができる場を探してもいた。あびっ子クラブで読書のチャレンジタイムを

行うことは、これら多層的なテーマを実現しうる公約数としてふさわしかったといえるだろう。また『目標の遂行』に関連した語りからは、Aさんが、本選びやチャレンジタイム活動に対して知識経験に裏付けられた確かな判断基準を備えており、やらない・できそうもないことを要求されたら『回避型コーピング』もしっかり使えるであろうことが伺えた。以上の3テーマと、Aさん自身のもつ『能力』を表3としてまとめた。

表3 Aさんの語りと背景テーマ・個人資源の抽出

『人生のシフトチェンジ』テーマ	
面接	【自分の力で】
I-③	「お医者様はね、食べられないんだったら大変だから、お薬出すからって。そのあとのお薬が問題だったんですよ。薬局行くじゃないですか。薬局の方がね、「これは胃薬と頓服です」って言った。胃のお薬。消化剤と頓服で私の病気が治るなんて、なんか人をバカにしてるなあって思って、それがすごいショックだったんですよ。それで逆に、「私こんな胃の薬と頓服で治りたくないわ」って言って、それからなんですよ」
I-⑧ (-)	「だからね、体力があるうちに、こういうところに入ってきてよかったなあって。体力が少しでも落ちて、たとえば60歳になってだったら、もっと違っただろうなと思います。厳しいだろうなあって思いますね」
【地域に入る】	
I-①	(価値観が同じ校長先生が)「辞めるって何った時に、この方がお辞めになって次にどんな方がいらっしゃるかかわからないしと思って、もういいや、後(定年まで)2年もやるんだったら、地域に入って何かやるんだったら体力があるうちかなと思ったんです。(略)もう辞めて「何やろうかな」って考えていたんですけど、いやいや、やめてみたら、地域に何かあるかもわからないのに。全然わからなかったですからね」
I-③	「結局、地域に入るってすごい努力がいることだと思うんですよ (傍で例えば、ストレートに上手に繋がっているように聞こえますけれど。それでも、ハンディがあるという感じだったんですね) 「ありますね。(略)だから、ずっと主婦だったというか、地元で主婦をやっていたりとかすれば違う生き方ができたんでしょうけれど、全然違いましたからね」 (教員として子どもとは関わっているから、むしろ主婦の方よりは?) 「いや、でも違うと思います。こういうところに入っていくってということが、何て言うんだらう、町の組織がわからないっていうのがありますでしょう。(略)結構、お仕事してた人っていうのは、大変なんじゃないですかね。あのほら、男の方ってお仕事をしていて、辞めてもなかなか地域に入れないうっていうの、わかる気がしますね。(略)」
I-⑩	(まちづくり協議会には)意欲に燃えた人がすごく集まっていて、企画しているんですよ。お母さんが子育てで煮つまらないように手助けしてあげようとか、お子さんを集めて催し物を作ってあげようとか。 (上がるきっかけは、その“まちづくり協議会”入っていったってこと?) 「はい。地域のことがわかってきた」
『お役に立つ』テーマ	
【子どもが好き】	
II-(1)	「それこそ自己満足の類っていますか。子どもたちといるのがとりあえず楽しいという」

【人のために何かやりたい】

- I-① 「私、仕事辞めたら、いわゆる帰国子女に勉強教えてあげたいなって思ってたんですよ、学校行きたくないっていう子もあるし。そういう場所を設定することがわからなかったし。で、こういうところでもできるかなって単純に考えたんですけど、さっきお話したみたいに知名度が全然ないし、、、だからこれは難しい、信頼関係が結べないところでは難しいんだなって」
- II-① 「あとは、(今続けられている理由は)人のために何かやりたかったのは、できてるかなあっていうのが、やっぱりありますよね」

『目標の遂行』テーマ

【かねてからの関心】

- I-① 「ちょうど価値観が同じ校長さんが女性だったんですよ。その方がすごく荒れた学校に、私が行ったとき、すごく荒れていたんですよ。先生方の価値観もみんなそれぞれバラバラで、でもその方がいらしてね、窓から鍵盤ハーモニカを投げたり、黒板消しなどを投げたりする学校だったんです。校長さんがいらして、いつも朝会の時に本を読んでくださって。そしたらね、すごく子供が穏やかになったんですね。それを見たときに、ああ読書って、本ってすごいんだなって思って、、、」
- I-① (国語に関して、ご自身は特にこだわりがあったわけではない)
(略)「そうですね。ただ読書にだけはね、子どもの本を読む会というのにずうっと参加していて」
(それは、仕事をしているときから?)
「そうそう、周りにそういうのがあった」
(じゃ、感覚はあったんですね?)
「何となく。そういう先輩がいらっしゃるというのも大きかったんだと思うんですけどね。あと古田足日とか長崎源之助とか、懐かしい名前ですけどお会いしたことがあるんですよ。..、松谷みよ子さんとか」

【本を地域に広げたい】

- I-⑦ (活動を始めた事情は)、やっぱりね、探していたんですよ。読書普及のスタッフの任期が終わる前年だったんです。(略)スタッフとして指導受けた割には、自分たちの活動の場が、ぜんぜん。..、探すにしても、そんなにわからないんですよ。私なんかもともと東京で務めていたし。子供もここの学校のあたりじゃなくて、、、だから全然わからないんですよ。ご近所の方と面識はあるけれど、でも、私はもともと職業を周りに言っているわけでもないんで、忙しくしてる人だな、ぐらいなので、全然そういうのわからないし。(略)みんな焦ってたんですよ。

『能力』

【本の選び方への基準】

- I-⑧ 「図書館の方っていうのは本当に言葉を選ばれ絵を選ばれ、子どもに与えるものとかはすごく考えられている。私はこういう、向こうの方に言われるまで、絵なんか気にもしなかったし。絵本のいいと思うのは、自分でいいなと思うところで終わっていたんですね。
(図書館スタッフとなって、すごく鍛えられたんですね)
「鍛えられましたね。だから内容も絵も文も、それから季節もね、言われると、ああ、そういうものなんだ、ただ面白ければいいというものじゃないんだと思って。やはりきれいな言葉とか、きれいな絵じゃないと響かないんだなと。」
- I-⑨ 「(本の価値観が違うと)新聞で紹介されて面白い本とか新刊とかありますでしょ、ああいうのをもってらして、「ん?」というの、やっぱり、思うときがあるんですね。(略)

受けるからいいだろうな、みたいな。それだけじゃ読み聞かせに意味は、ないんじゃないかなって思ったりするんですよ」。

【活動の在り方への基準】

II-(2) 「(百人一首とか) 大人になって1個でも覚えていけば忘れないし、一枚でも取れるじゃないってことで、やっているのですけどね。今だからこそ日本の言葉を、昔話の語り口も今だからこそ大事にしたいなあっていう、そういう思いはありますけれどね。それをあえて人前でやらなくてもいいかなあ」
(派手にする必要は別ない?)
「そうね。考えてないですね」

II-(2) (他の学校の方に行ってあげようとは思わない?)
「思わないですね。多分、その地区のその方が入ってらして、そういうものが出来上がっているらしていいかなと思うので」

(注1) 面接とは、語りが得られた面接回 (I : 第一回, II : 第二回), と対応番号 (第一回は①~③, 第二回は個別 (1) ~共同 (2)) を示す

(注2) 「」はAさん, () は面接者の語り, …は語り中の沈黙, …は重複などの表現整理, (略) はやりとりを中途割愛をしたことを示す

(注3) 【】は語りの概要を示すラベル

継続要因とテーマの全体整理

Aさんの語りから抽出したコーピング・テーマ・資源(環境と個人)のまとめとして、Aさんがどのようなテーマ(ねがい)と各種資源(能力、人的・物的サポート)のもとでどのような対応を試みていたのか推定し、全体の流れを図2としてまとめた。

すでに紹介したように、あびっ子の地域サポーターは、子どもたちや社会の『お役に立つ』ために、多少の困難があっても活動方法を工夫するなど前向きな『問題(解決)型』対処を試みている(北原ら, 2009)。そうした直線的な『ねがい』→『ねばり』の流れは、Aさんの語りからも確かに確認することができた。そうしたねばりは、Aさんの語りによれば本人単独の力だけでなく、Dさんという仲間の存在や適度な活動ペースなど、人的物理的な『環境資源』に恵まれ支えられたおかげとされていた。一方でAさんは、なかなか子どもが集まらなかったり聞いてくれなかったりする状況に対し『気そらし型』対処も行っており、また必要とあれば『回避型』といった『ねばらない』対処もうまく用いることができそうであった。これらは消極的にも見えるが、Aさんの中にある『人生のシフトチェンジ』テーマや『個人資源(内在する活動基準)』を背景として理解すれば、ごく健全に用いられる対処であるといえよう。

ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討

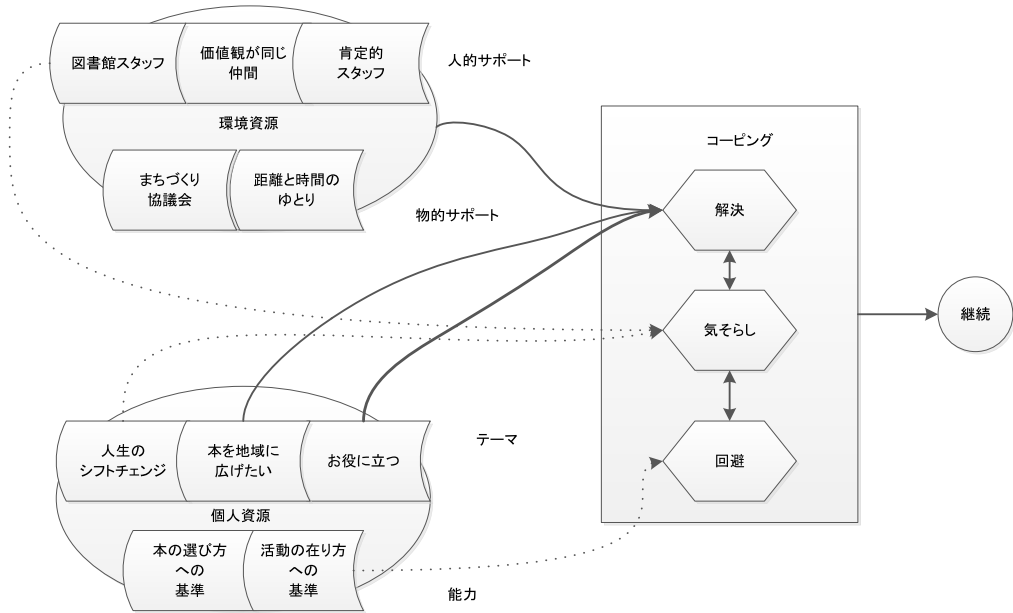


図2 Aさんの活動継続に関わる諸要因

全体討議

問題提起で指摘したように、放課後の出入りが激しいあびっ子では、子どもが来なかったり、来てもきちんと活動に乗らなかったりと、ボランティアにストレスを感じさせるリスク因子が多々存在している。Aさんと同じく『役に立つ』志を抱いて参加するサポーターは多いが、実際にはなかなか思いが叶えられずに苦勞するところである。そのようなストレスに対しAさんは、【参加やプログラムを工夫】などして状況改善に向け工夫すること、【少数でも好きな子がいる】など肯定面を見て気持ちを立て直すこと、ことによっては【特殊な場所だから仕方ない】とあきらめることなど、多様な対処を状況に応じて行っていた。このようにコーピングが多様で柔軟に使えることは、精神の健康を保護する上で重要な役割を果たすと指摘されており(三野・金光, 2004), Aさんが粘り強く活動を継続できた鍵であったといえよう。

それでは、こうした多様で柔軟な対処は、いかにして可能になったのだろうか。Aさんは【価値観が同じ仲間】であるDさんと出会えたからこそ活動が継続できたと、くりかえし強調して述べている。また語りからは【相談できる現場スタッフ】【専門家の助言】など、多くの支え手が登場していた。求めたソーシャルサポートがいかたちで得られたことに大きな意義が

あったことは明らかである。

また、活動に求めるテーマが多層的で堅実だったことも、対処の多様性と関わっていたと考えられる。冒頭に述べたように、あびっ子設置当初に参加名乗りを挙げた地域サポーターの多くは、社会に対する危機意識と呼応して「子どもはみんな良い子」という肯定的子ども観を抱いており、その分『お役に立つ』という気負いが強すぎたかもしれない。Aさんは継続できる二番目に重要な要素として、自分は子どもと関わるのが楽しく子どものためになっていると充実できるからとした。「子どものよりよい育ちに（押し付けではなく、子どもに本当に役立つようなかたちで）貢献したい」との思いをまとめて、Aさんは「自己満足？」と名付けている。この名づけの謙虚な姿勢からは、永く教育に携わってきた者としての優れた自己内省のほどが伺える。

一方、永年都心に通勤し忙しい教員生活を送ってきたAさんは、地域にしっかり根をおろし、自分の時間も大切に生活を目指していた。『第二の人生開拓』は退職後の年代にとって普遍的で重要なテーマだが、Aさんの場合、この夢の内容が堅実なもの特徴的であった。サードエイジ（高齢者）研究において、成功的高齢者は気力体力の衰えを認知の選択的最適化（選択、最適化、補償）によってカバーすることが指摘されている（Baltes, 1997）。今はまだ特別なカバーの必要もないだろうが、賢明なAさんは先々を見据えて、読書普及に絞って近場で活動する無理のない自己実現をテーマに選んだのであった。とはいえ、退職当初は「広報さえ読んでなかった」「地域の図書館の場所もわからなかった」というAさんは、はじめは地域に入る勝手がわからず、苦勞されていた。そんな初めのころのAさんにとって、あびっ子は【距離と時間にゆとり】があるだけでなく、【地域のことがわかる】夢実現への試金石としても「ねばりたい」場所だったのではないだろうか。今ではAさんは地域事情にも通じ、他にも複数活動の場をもっている。夢がかなってきたゆとりは、思うように子どもが参加してこなくても、【特殊な場だからしかたない】（＝ここは子どもが発散する場だし、これも地域のご縁だし、他にもいろいろ場はあるし）と、回避的思考を健康的にはたらかせる下支えになっていると思われる。

さらにあびっ子は、Aさんが第二の人生目標として絞り込んだ『目標（＝読書普及活動）の遂行』テーマにかなう実践の場であり、その観点からも「ねばる」甲斐があったといえる。Aさんの語りからは、本の選び方見方については【在り方の基準】が明確なことが伺え、この磨き培ってきた専門性こそが、子どもに振り回されて終わることなく、さまざまに工夫を凝らして自律的に活動を継続できた要であったといえよう。ここでAさんは図書館職員に子どもが来ないと相談して、「一人でもいればよい」と言われ救われたというエピソードを紹介してい

る。読書のあるべき姿や、読書活動をする意味について深く考えたことが、いたずらに人を増やすことに走らず、今来ている子どもを大切に作るコーピングスタイル調整につながったのである。

このようなAさんの活動継続経緯からは、単にその場での「困難な状況」にうまく対処してリスクを低減させるというより、ストレス経験を通じて「成長する」見通しの元で生涯発達を目指してゆく姿が浮かび上がってくる。川島（2007）は、従来のストレス・コーピング研究では対処プロセスが消極的なリスク・マネジメントとして受け止められてきたが、ポジティブ心理学から派生した Proactive Coping 研究の中では、対処プロセスは自己実現の1ステップとしてのゴール・マネジメントと捉えられると述べている。Aさんに関して言えば、まさにこうした積極的な観点でのモデルに適当な事例だと思われる。その際、本研究では対処の背景因子として『テーマ（願い）』と名付けた動機を想定したが、これらを理論枠組みの中でどう位置付けるかについては、さらに検討が必要である。

なお、今回の協力者Aさんは読書普及という特定活動を行うボランティアであり、さらに子どもと関わる経験も読書活動に関する知識も豊かな人材であった。伊藤（2000）は教員のバーンアウトを防止する要因について質問紙を用いて定量的に調査した結果、ソーシャルサポートと共に本人の指導能力がバーンアウト抑制に寄与すると報告している。Aさんの語りからも、これまでの知識経験の豊かな蓄積が気負いすぎない適切な対処を支えている様子が確認された。しかし実際の現場には、見守りサポーターのように特定活動をもたず参加する人や、特別な経験知識がなく参加する人もいるだろう。そのような方々がどのような『ねがい』のもと『ねばる』か、またそれをいかに支えて「開かれた出会いの場」を開拓し子どもたちに提供できるかについても、今後は検討が必要である。

補足（Dさんの語りについて）

今回の調査では第二回面接時に、Aさんの活動仲間であるDさんにも参加いただき、活動継続に役立つ事柄について述べて頂いた。Aさんと共通する要素も多いが、特に「子どもへの係わり」については、学童保育士の経験をふまえた語りが得られた。また、Aさんと筆者とのやりとりに対し、まさに Proactive な観点からの的確なコメントもしておられたので、ここに一部を紹介しておく。

補表1 活動継続に関わる要因についての協力者の語り (Dさん)

継続要 因	・自分が楽しむこと ・気楽に ・あまり神経質にならずに ・話し相手がいる ・子どもへの係わり
II-(1)	「学童の仕事をちょっとやっていたので、子どもとの関わりという点では、何ていうかな押し付けるんじゃないでなくて、特に絵本は、これだけ子どもが伝わったってということがわかるわけではないんですけど。この本がいいなと自分では思っているけど、子供が受け止めてくれないのは意味がないので。その子どもの関わりが自分のポイントみたいところでやってゆくの、継続していく力になっている。 (略) 押し付けるのは簡単だけど、私このお話が好きだしこの話が大事だからいいかなって言うのは簡単だけど、でもそれを受け取る子どもたちがどういふふうに感じてくれるのかが一番大事。自分の思いが割合先行してしまうことが多いんですよね。でも、そうではなくて、相手が楽しんでくれるのかがあっていう。そこを大事にしていかないと、いい意味で続かない。ていうか、続かない」
II-(2)	(流動的で難しい場だと思うんですが、それはそれでつらくないですか。もう慣れた?) (A) 慣れましたね。最初の頃は何だろうって思いましたけど。せっかくやってきたのになんだって。せっかくお話ししてるのに何で出ていくのみたいな。保育園で読み聞かせやってますけど、ちゃんと聞いてますでしょう。 (D) でも逆に、あびっ子ってそういうチャレンジ? (A) そうなんですよね。あびっ子ってそういうところだって思っちゃうから。私 Bさんと一緒にやっていた時に、彼女はそれに耐えられなかった。やっぱりきちっと座っているのを見てきているから、私こういうところでやれないって。

(注) 継続要因は協力者自身の分析通り、下線は proactive なコーピング

文 献

- Baltes, P.B. (1997). On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory., *American Psychologist*, 52, 366-380.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎 (2011). 小学生の放課後の過ごし方—仲間遊びにおけるコミュニケーション行動. *日本発達心理学会第 22 回大会論文集*, 658.
- 伊藤美奈子 (2000). 教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究—経験年数・教育観タイプに注目して. *教育心理学研究*, 2000, 48, 12-20.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・板野雄二 (1995). 対処方略三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成. *筑波大学教育相談研究*, 33, 41-47.
- 川村学園女子大学放課後子ども研究会 (2010). 放課後子ども教室参加ボランティアインタビュー記録 (D氏) 子ども未来財団平成 21 年度調査研究等事業報告「放課後子どもプランの実際の運営について自治体レベルでの評価指標作成に関する研究—子ども・保護者・教職員・ボランティアへのアンケート調査に基づいて—」別冊資料
- 河村茂雄 (2000) 心のライフライン—気づかなかった自分を発見する. 誠心書房

- 川島一晃 (2007). 成長へ結びつけるコーピング研究の理論的検討—新しいコーピング理論としての Proactive Coping Theory—. *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences)*, 54, 93-101.
- 北原靖子・柴田恵江・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2009). 放課後子ども教室に参加する地域の非専門家による語り (1)—動機・やりがいについて. *日本発達心理学会第 21 回総会大会論文集*, 194.
- 文部科学省・厚生労働省放課後子供プラン連携推進室 放課後子供教室全国の事例 千葉県我孫子市あびっこクラブ <http://manabi-mirai.mext.go.jp/exam/detail/kanto/2073.html> (2014.10.1)
- 西村芳彦 (2013). 放課後子どもプランにおける放課後子ども教室の課題—中核市千葉県柏市の事例を中心に—, *早稲田大学大学院教育学研究科紀要*, 20, 2, 209-219.
- 三野節子・金光義弘 (2004). ストレス場面の認知的評価及びコーピング変動性と精神的健康との関連性—大学生の個人内関連特性に基づく分析を通して— *川崎医療福祉学会誌*, 14, 1, 167-171.
- 柴田恵江・北原靖子・川嶋健太郎・蓮見元子・浅井義弘 (2010). 教育の非専門家が小学生と関わる時に会う課題 (2)—放課後子ども教室に参加する地域ボランティアの工夫. *日本教育心理学会第 52 回総会大会論文集*, 683.
- 高橋尚也 (2014). 地域活動への参加によって生じる意識変化. *日本心理学会第 78 回大会発表論文集*, 1PM-1-016.

謝 辞

本研究を実施するに当たり、全面的にご協力くださった A さん及び D さんに、こころより御礼申し上げます。